

# 形容動詞文の表出用法について

近藤 研 至

## 0 はじめに

小論では、「やわらかだ」「元気だ」「パワフルだ」「ドロドロだ」など、「Xダ」の形式を持つ、いわゆる「形容動詞」<sup>1</sup>に分類されている語種が述語になる、「形容動詞文」を考察の対象とする。そして、その形容動詞文の中の、

- (1) a ひ弱だ！      /      新鮮だ！  
      b ひ弱！         /      新鮮！

のような表現タイプについての考察を行う。

近年、

- (2) a あつ(熱)！    /      はや(早)！

のような表現タイプについての考察が多くなされている。近藤(2019)では、(2)aは

- b 熱い！         /      早い！

の表現タイプと同じ「形容詞文表出用法」であるとして考察を行った。小論では近藤(2019)での考察に基づき、(1)a、bを合わせて「形容動詞文表出用法」と認定し、その表現タイプについての考察を行う。

## 1 形容動詞について

### 1-1 形容詞と形容動詞

語を意味的な観点に基づいてタイプ分けをおこなった時、形容詞と形容動詞は、感情・感覚、状態、性質などを意味として負担するということから、同じ品詞タイプに分類されることが多い。西尾(1972)は両品詞の関係について、

日本語の形容詞は歴史的に途中で発達がとまってしまった観があり、これをカヴァーするものとしていわゆる形容動詞が発達してきている。

---

<sup>1</sup> 小論では「形容動詞」を採用するが、これらは「名容詞」「形状詞」「状名詞」「ナ形容詞」等々、その呼び名はさまざまである。そしてそもそも、これらが「一語」であるかどうかすら、いまだ議論の中途であると言える。

と指摘をする。「エモい」「ガジェガジェしい」「微妙い」「謎い」「ピンクい」のような派生に、また、「あざとかわいい」「エロかつこい」「鬼うまい」のような複合により、形容詞は現在も産出されており、形容詞を「閉じたクラス」と扱うには問題はあるだろうが、「ぽっくんぽっくんだ」「やばかわだ」「どクラウドだ」など、際限なく産出される形容動詞と合わせて、両者は一つの意味タイプを形成しているということは否定できない。しかしこうした意味的な観点からではなく、形態の観点からだと、それぞれは同じクラスとは言えない。ただし、それはイとダという(活用)語尾の形が違うといった単純なことだけではない。形容詞の語尾におけるアクセントパターンは一定であるが、形容動詞のダ位置のアクセントパターンは一定ではないという異なりもある。形容動詞が一語であるかどうかという議論が古くからしばしばなされることがあるが、この語尾のアクセントパターンが一定ではないということからもサポートされる。西尾の、形容詞の語彙数が形容動詞によって補完されるという指摘は、意味的な観点からすると正しいだろうが、それは「語として補完する」とは同義ではない。形容動詞が品詞(語)としての安定性がないとしても、「Xダ」というその「形」において意味的クラスを補完するということを否定するものではない。小論では、形容動詞を語として認定するかどうかの議論はせず、表現におけるある意味を、「Xダ」という「形」は形容詞と同じく担っていると捉え、西尾の指摘(「カヴァーする」)を肯定した上で、「Xダ」を「形容動詞」と呼び考察を続ける。

## 1-2 形容動詞のバラエティ

形容動詞「Xダ」は、X部分に注目することで、いくつかの語構成のパターンに整理できる。

### ① 和語系

穏やかだ、かわいそうだ、さすがだ、幸せだ、静かだ、楽しみだ、にぎやかだ、久しぶりだ、まじめだ、やわらかだ 等

### ② 漢語系

きれいだ、雑だ、親切だ、新鮮だ、重要だ、上品だ、退屈だ、ダメだ、独特だ、便利だ、満足だ、立派だ 等

この①と②の語は語彙量の増減はあまりなく、語として完熟しているものがほとんどである。それに比べて③以下は生産性が高いパターンである。

③ 外来語系

クールだ、ジューシーだ、スマートだ、ハードだ、フレッシュだ、ブラックだ、マッショだ、ゲームオーバーだ 等

いくつかは見出し語として登録されているものもあるが、いくらでも生産できる。その点からすると、「一語」であるという点では不安定かもしれない。それは④以下も同じである。

④ オノマトペ系

- 反復型：ガチガチだ、ギザギザだ、ゴリゴリだ、ダラダラだ、ドロドロだ、ビショビショだ、フワフワだ、ボロボロだ、メロメロだ、モクモクだ 等
- 非反復型：ぞっこんだ、たわわだ、ぴったりだ、ぴっちりだ、ゆるフワだ 等

⑤ 新造語系

- 省略・イニシャル：エッチだ、Sだ、Mだ、マンネリだ 等
- 複合語：ガチだ、イマイチだ、きれかわだ、セクハラだ、細マッショだ、リア充だ 等

⑥ 連語

- 和語：当たり前だ、思い通りだ、てんてこ舞いだ 等
- 故事成語などの漢語系：温厚篤実だ、荒唐無稽だ、時期尚早だ、無知蒙昧だ 等
- 新造語：3密だ、自己中だ、持続可能だ 等

⑦ 派生語

- 接頭辞付加系：「不○」（不格好だ、不気味だ、不細工だ）、「大○」（大好きだ、大嫌いだ）、「ど○」（どクラウドだ、どストライクだ、ど本命だ）、「ま○」（真っ逆さまだ、まっさらだ、真っ白だ）、「激○」（激あつだ、激おこだ、激レアだ）、「その他程度が甚だしいことを表す接頭語○」（ガチまずだ、テラやばだ、鬼まずだ、ギガやばだ、くそまずだ）
- 接尾・辞付加系：「○そうだ」（熱そうだ、賢そうだ、生臭そうだ）、「○みたいだ」（ゴルゴンゾーラチーズみたいだ、魚みたいだ）、「○すぎだ」（うますぎだ、厳しすぎだ、やりたすぎだ）、「○系だ」（金持ち系だ、ビジュアル系だ）、「○のだ」（意図的だ、画期的だ、積極的だ、ブルデュー的だ、モブキャラ的だ）、「○風だ」（高校生風だ、佐野ラーメン風だ、純和風だ）、「○ムードだ」（楽勝ムードだ、しらけムードだ）

このタイプは、語として認定するかどうか悩むほどとても高い生産性を持つ。

形容動詞が生産されるには、既存の非活用形の語にダを付加するというだけで済むことではない。「語幹」となるための操作が行われる。たとえば、「きれかわだ」や「細マッチョだ」という形容動詞の産出には、「きれいでかわいい」から「きれかわ」が、「細いマッチョ」から「細マッチョ」ができ、それにダが付加されることで「きれかわだ」「細マッチョだ」という形容動詞が産出される。こうした操作は名詞産出の操作でもあるが、形容動詞産出においては語幹化として必要な操作である。

## 2 形容詞文の表出用法について

### 2-1 形容詞文の表出用法

文は、いくつかのタイプに分かれることが指摘される。述べ方に即した分類では、「平叙文・疑問文・命令文・感嘆文」といった最も有名な分類に始まり、いくつかの分類が提案されている。これとは別に、述語の品詞に即しての分類として、「動詞文・形容詞文・名詞文」がある。近藤(2015)では、しばしば見かける

#### (3) うま(旨)!

のような表現を扱ったが、その形態自体を独立した文型として扱わないで、形容詞文という枠内において処理をした。そして近藤(2019)では、述べ方に関わる視点として、従来の「感嘆文」というタイプとして扱わないで、「表出用法」というタイプを提示し、考察を行った<sup>2</sup>。こうした一連の扱いは、あくまで形容詞文という整理の仕方の中で、

#### (4) このラーメンはうまい。

といった、対象についての属性を叙述する「述定」とは別に、(3)のような「表出」があるという指摘をして、形容詞文に「述定用法」と「表出用法」があるという視点でまとめた。

<sup>2</sup> このような表現タイプは、その形態自体を独立したものとして、かなりいろいろな呼び名の下で取り扱われている（富樫(2006)、今野(2012)、原田(2013)、清水(2015)など）。それとは違って、小池(2002)、笹井(2005)、岩崎他(2007)、近藤(2014)など、他の表現タイプの一つのあり様として扱っているものもある。近藤(2019)も後者のスタンスで考察をした。

形容詞文の表出用法は以下の性質を有する<sup>3</sup>。

① 状態記述を行っている。

(ア) 記述内容を持つ。

(イ) その記述内容は、(話し手自身の感情、感覚を含めて)現時点に限定される、実際に成立している状況である。

(ウ) 対象についての叙述は行わない。

② 表現上の性格としては、「非伝達性」や何らかの「情意性」(驚嘆、詠嘆など)を持つ。

こうした性質を持つ形容詞文の表出用法には、

(5) a うまい!

b うま!

という2形態がある。近藤(2019)では、前者を「基本型」、後者を「イ落ち型」と呼んだ。

## 2-2 表出用法の統語的特徴

形容詞文の述定用法の構文形式「XハY(形容詞)」「XハAガB(形容詞)」を前提としたとき、表出用法は、「状態記述」という性質から、「主題Xを持たない」、「モーダルの形式は現れない」という特徴を有し、「非伝達性」という性質から、「聞き手目当ての終助詞や丁寧体を持たない」という特徴を有する<sup>4</sup>。

① 「主題Xを持たない」について

(6) a うまい!    b エロい!    c 近い! : 特性・属性形容詞

(7) a うま!    b エロ!    c ちか(近)!

(8) a 楽しい!    b ヤバい!    c 懐かしい! : 感情・状態形容詞<sup>5</sup>

(9) a 楽し!    b ヤバ!    c 懐かし!

これらに見られるように、対象についての叙述を行わないので、基本型においてもイ落ち型においても、対象Xは現れない。ただしX自体は出現する場合があるが、

(10) a このビール { \*ハ / φ } うまい!

<sup>3</sup> 八亀(2008)は、「痛い!」などを「表出の一語文」と呼び、「表出はまだ文として未分化の状態」としている。この指摘がどういうことを意味しているのか理解できないが、少なくとも叙述は認識として分化がなされた結果の下でしかあり得ない。

<sup>4</sup> 以下の指摘は、近藤(2019)を前提しているが、その後、近藤(2019)②で修正をしているため、基本的には近藤(2019)②に依拠した部分が多い。

<sup>5</sup> この二つの形容詞区分は、影山編(2009)によった。

b このビール {\*ハ/φ} うま!

のように提題の助詞ハによってさし出されず、この場合のXは対象ではないと言える<sup>6</sup>。また、「XハAガB」の場合、

(11)a ズウ {\*ハ/φ} 鼻 {ガ/φ} 長い!

b ズウ {\*ハ/φ} 鼻 {ガ/φ} なが!

のように、Xは無助詞、Aはガの場合も無助詞の場合も同程度に許可される。

② 「モーダルの形式を持たない」について

表出用法は、発話場の状況の記述であるために、モーダルの形式は現れない。

(12)a \*熱いだろう!      b \*熱いかもしれない!

c \*熱いようだ!

(13)a \*あつだろう!      b \*あつかもしれない!

c \*あつようだ!

イ落ち型の場合、語尾を持たないという形態上の問題からモーダルの形式が現れないという見方もありそうだが、そもそも表出用法の性質からすると、語の機能的な部分を必要としないがゆえに「イが不在」であっても問題ないと考えべきである。形態上の制約は性質上の制約から生じたものであると考えなければならない。

ちなみに、モーダルの形式ではないが、以下の「時制」と「肯定・否定」は、表出用法の特徴としてあり得ることとして指摘しておく。

○ 時制

たとえば、お化け屋敷に入って、

(14)a 怖い!

は表出用法である。しかし、お化け屋敷から出てきた直後の

b 怖かった!

もまた表出用法と言える。認識の発生には「(新規) 出現」による発生と「解消」による発生がある。aは出現による発生であるが、bは、「怖い」認識が継続していて、それが何かを契機（この場合は「お化け屋敷を出る」という契機）として、「怖い」が解消された」という認識である。

○ 肯定・否定

たとえば注文したラーメンが出てきて、一口スープを飲んだ直後に発

<sup>6</sup> こうした主張は近藤(2014)において行ったが、清水(2015)も同様の主張を行っている。

せられた、

(15)a ぬるい！ b 熱くない！

はともに表出用法と言える。a、bはその事態を経験するにあたって、前提的な認識があるかないかを反映している。aは「ラーメンのスープは熱いものだ」という前提的な認識がある場合にもない場合にもあり得る発話であるが、bはそうした前提的な認識がなければ発話できない。こうした現象は、形容詞文の述定用法が属性叙述を行うものであるということと、表出用法がその場の状況・状態を記述するものであるということとの差である。あくまで表出用法は、その場の状況である限り、時制から解放されているわけではない。

なお、ここで述べた「時制」と「肯定・否定」は、イ落ち型の場合には現れない。

(16)a \*体、でかた！ b \*体、でかない！

### ③ 「聞き手目当ての終助詞や丁寧体を持たない」について

この特徴は、非伝達性によって制御されるものである。表出用法が非伝達性を有している限り、丁寧体は現れない。また同じ理由から、聞き手目当てであることを前提に付加される、ネなどの終助詞は現れない。それに対して、相手に持ちかけないワは許可される<sup>7</sup>。ただし伝達性の弱いヨ（下降調）については微妙なところである。

(17)a \*苦いです！ b \*苦いね！ c ?苦いよ！ d 苦いわ！  
ただしイ落ち型ではヨもナアもワも許可されない。

(18)a \*にがです！ b \*にがね！ c \*にがよ！ d \*にがわ！

なお、①、②、③で指摘した統語的な特徴以外にも、表出用法において「程度の強調」や「詠嘆」などをはじめとした文体的な特徴を持つことがある。

<sup>7</sup> 終助詞は伝達性を表すタイプと、確認や詠嘆を表すタイプとがあると分類されることが多い。ネなど確認を表すものは表出用法には現れないが、伝達系のヨは相手に向かったり自分に向かう用法の時は伝達性は弱い。その場合は許可されそうだが、表出が即時性だということになると、やはりその判断は困難である。また、「苦いなあ」のような詠嘆の場合、「にがいー！」といった長音による詠嘆と比べると、やはり表出として扱うのには無理がありそうである。なお、ワについては伝達系として分類されることがあるが、ここでの許可が観察されることから、ワ自体の伝達性についても今後考察が必要であろう。これは表出用法の性質から生ずる問題だけでなく、終助詞自体の問題でもあり、今後の課題とする。

(19)a あっつい！      b あついでー！      c あっついでー！

(20)a あっつ！      b あつー！      c あっつー！

のように、促音介入、長音付与は、どちらのタイプでも可能である。

### 2-3 基本型とイ落ち型

ドルヌ+小林(2005)では「関西以外ではまだそれほど多くない」という指摘が、また富樫(2006)では「感情形容詞では現れにくい」や「程度表現との非共起」や「2モーラ形容詞のイ落ち不可」という指摘がなされている。しかし、現在、「さみし！」「楽し！」「ちょーこわ！」「こ！（濃い）」「よ！（よい）」「かわいくな！（かわいくない）」「おいしくな！（おいしくない）」などの表現は日常的に見られる。こうしたことを受けると、2000年初頭のころは、イ落ち型は表出用法のタイプとしてはそれほど熟したものでなかったと言えるだろう。そもそも表出用法としては基本型があり、イ落ち型がそれと同じ状況でも使われるようになっていったと考えるべきだろう。基本型は「解消による認識の発生」と「前提を持つ場合の認識のあり方」についても対応する形式であるが、イ落ち型は、「出現による認識の発生」と「前提を持たない事態即応的な認識」という認識のあり様にのみ対応する。そうした認識のあり様こそ、表出用法の典型的なあり様である<sup>8</sup>。典型的であるがゆえに、イ落ち型の使用頻度が増えてきたと考えるべきではないだろうか。

## 3 形容動詞文の表出用法

### 3-1 形容動詞文について

述語の品詞に注目してタイプ分けしたものでは、「形容動詞文」という整理は従来なされない。形容動詞は、西尾(1972)の指摘のように「形容詞をカヴァーする」といった観点から、形容詞と「同じ語種」として扱われてきたからであろう。

しかし形容動詞は、形態においては、形容詞ではなく名詞述語に近い。そのために形容動詞が述語位置に現れるときは、形容詞文よりも名詞文に近い現象が観察される。たとえば、

(21)a あの人って、親切。      b このカバン、ほんとに高価。

(22)a あの人って、近藤さん家の娘さん。

<sup>8</sup> ただし、とても危ない状況においては、「危な！」ではなく「危ない！」が現れる。状況と形容詞のあり様においてバラエティがあり、今後もう少し整理が必要であると思われる。



b このスマホ、アンドロイド。

などは、日常言語においてしばしば見られる形態であるが、これは、単に「ダが不在」という観点を指摘するにとどまらず、形容動詞におけるダについて注目した上で指摘しなければならない。形容動詞と名詞は、文における述語という観点で見るときには、Xダという形態として共通している。しかし、語尾ダを持つ形容動詞と、述語となるために「助動詞ダ」を必要とする名詞とは、「語」という観点において異なる。(21)と(22)は、「ダが不在」というだけでなく、形容動詞においては「語尾が不在」ということになるのである。こうした「語尾が不在」という視点を持ち込むと、

(23)a あの人がってやさしい。      b \*あの人がって、やさし。

(24)a このカバン、高い。      b \*このカバン、高。

のように形容詞文では、述定用法においては、「語尾が不在」は許可されない。この点から見た時、形容動詞が述語位置に現れる文は名詞文と近いと言える。しかし、表出用法においては、

(25)a あの人、やさし！      b このカバン、たか！

のように形容詞文はイ落ち型を持ち、「語尾が不在」はある。もちろん、「属性叙述」をするという点において、形容詞文と名詞文は共通するところがある。このように、形容動詞が述語位置に現れる文は、形容詞文、名詞文のどちらか一方のカテゴリーに所属するのではなく、どちらの述語文とも共通する性質を持つことから、「形容動詞文」というカテゴリーを立てておく方がよい。

### 3-2 形容動詞文の表出用法

形容動詞文には、

(26)a 新鮮だ！      b クールだ！

という表現がある。これは、形容詞文の表出用法が持つ、

① 状態記述を行っている。

(ア) 記述内容を持つ

(イ) その記述内容は、(話し手自身の感情、感覚を含めて)現時点に限定される、実際に成立している状況である。

(ウ) 対象についての叙述は行わない。

② 表現上の性格としては、「非伝達性」や何らかの「情意性」(驚嘆、詠嘆など)を持つ。

という性質を有する。そのため、(26)のような表現タイプは、形容動

詞文の表出用法と呼ぶことができる。さらに、形容動詞文の表出用法は、

(27)a 新鮮！            b クール！

という、ダという「語尾が不在(＝語幹のみ)」の表現タイプも許可される。このことを受け、形容動詞文の表出用法も、形容詞文の表出用法と同様に、基本型と「語尾が不在」の表現タイプ(以下、「ダなし型」)がある。

こうした形容動詞文の表出用法は、1で形容動詞の語幹のバラエティを整理した、そのすべてのパターンにおいて現われる<sup>9</sup>。

(28) 「楽しみだ!」「新鮮だ!」「クールだ!」「ぐちゃぐちゃだ!」「ぴったりだ!」「エッチだ!」「イマイチだ!」「自己中だ!」「時期尚早だ!」「ドストライクだ!」「激あつだ!」「不細工だ!」「ガチまずだ!」「頭悪そうだ!」「魚みたいだ!」「やりすぎだ!」「ビジュアル系だ!」「画期的だ!」「佐野ラーメン風だ!」「楽勝ムードだ!」

(29) 「楽しみ!」「新鮮!」「クール!」「ぐちゃぐちゃ!」「ぴったり!」「エッチ!」「イマイチ!」「自己中!」「時期尚早!」「ドストライク!」「激あつ!」「不細工!」「ガチまず!」「頭悪そう!」「魚みたい!」「やりすぎ!」「ビジュアル系!」「画期的!」「佐野ラーメン風!」「楽勝ムード!」

その統語的特徴についても、形容詞文と同様の性質を有する。「XハYダ(形容動詞)」「XハAガBダ(形容動詞)」において、「状態記述」という性質から、「主題Xを持たない」、「モーダルの形式は現れない」という特徴を有し、「非伝達性」という性質から、「聞き手目当ての終助詞や丁寧体を持たない」といった特徴を有し、この点において、形容詞文の表出用法と共通する。

① 「主題Xを持たない」について<sup>10</sup>

(28)(29)の例で見たように、形容詞文と同様に、形容動詞文においても、基本型、ダなし型の双方とも主題Xは現れない。ただしX自体は

<sup>9</sup> ここですべてのパターンに現れるとしたが、可能性であって、実際の発話では見られにくいものも多くある。中でも「温厚篤実だ!」「温厚篤実!」などの故事成語はそもそも日常言語において頻繁に現れるものでもなく、そのために表出用法としては使用されない。形容動詞は生産性が高いために、使用に汎用性がないものも、その場合は日常的に表出用法として現れにくい。これは使用上の問題である。

出現する場合があるが、

- (30)a この刺身 {\*ハ/φ} 新鮮だ！  
b この刺身 {\*ハ/φ} 新鮮！  
(31)a ケーキ{\*ハ/φ} ぐちゃぐちゃだ！  
b ケーキ{\*ハ/φ} ぐちゃぐちゃ！  
(32)a これ {\*ハ/φ} 激あつだ！  
b これ {\*ハ/φ} 激あつ！  
(33)a あの発言 {\*ハ/φ} やばすぎだ！  
b あの発言 {\*ハ/φ} やばすぎ！

のようにハによってさし出されず、この場合のXは対象ではない。また、「XハAガBダ」の場合、

- (34)a おれ {\*ハ/φ} あの子 {ガ/φ} ドストライクだ！  
b おれ {\*ハ/φ} あの子 {ガ/φ} ドストライク！  
(35)a あいつ {\*ハ/φ} 態度 {ガ/φ} クールだ！  
b あいつ {\*ハ/φ} 態度 {ガ/φ} クール！  
(36)a このラーメン {\*ハ/φ} 麺 {ガ/φ} 佐野ラーメン風だ！  
b このラーメン {\*ハ/φ} 麺 {ガ/φ} 佐野ラーメン風！

Xは無助詞、Aはガの場合も無助詞の場合も同程度に許可される。この点においても形容動詞文は形容詞文と同じである。

## ② 「モーダルの形式は現れない」について

形容動詞文の表出用法も、形容詞文と同様に、モーダルの形式は現れない。

- (37)a \*元気だろう！      b \*元気かもしれない！  
c \*元気にちがいない！

ただし、形容動詞文の場合は、述定用法においてそもそもモーダルが現れるとき、

(38) あの店の刺身は{新鮮だ・新鮮だろう・新鮮にちがいない}。  
のように、活用形ではなく、モーダルの形式は語幹に後続し、基本形に後続する形容詞とは大きく異なるのである。そのため形容動詞述語の表出用法の場合、基本型とダなし型のモーダルの接続テストは、(37)のテストとして共通している。

また基本型においては、「時制」と「肯定・否定」は現れることが

<sup>10</sup> 以下、検証をするが、全ての形容動詞のボタンについて行うことはせず、それぞれについてはいくつかのボタンを取り上げて見ていく。

あるという、形容詞文の表出用法で見た特徴についても、同様の特徴が現れる。

- (39)a さすがだ！      b さすがだった！  
(40)a さすが！        b \*さすがた！  
(41)a 見事だ！        b 見事だった！  
(42)a 見事！            b \*見事た！

新しいアトラクションを経験して、入場直後の発話の a、退場直後の発話 b が、基本型にはあり得るが、ダなし型には入場直後の発話の場合しかあり得ないことがわかる。

肯定・否定についても同様である。

- (43)a 退屈だ！        b 退屈じゃない！  
(44)a 退屈！            b \*退屈ない！  
(45)a フワフワだ！    b フワフワじゃない！  
(46)a フワフワ！      b \*フワフワない！

a、bはその事態を経験するにあたって、前提的な認識があるかないかを反映している。aは前提的な認識がある場合にもない場合にもあり得る発話であるが、bは前提的な認識がなければ発話できない。

### ③ 「聞き手目当ての終助詞や丁寧体を持たない」について

この点については、形容詞文の表出用法と少し異なった振る舞いを見せる。形容詞文の場合は、丁寧体については基本型、イ落ち型のいずれにも現れることはなかったが、終助詞については二つの型において異なった現象が検出された。基本型ではワは許可され、ヨについては微妙であり、イ落ち型ではどの終助詞も許可されなかった。しかし、形容動詞文ではそれと少し異なった現象が観察される。

- (47)a 眠い {\*ね/?よ/わ}！ / 若い {\*ね/?よ/わ}！  
      b ダラダラだ {\*ね/よ/わ}！ / 新鮮だ {\*ね/よ/わ}！  
(48)a 眠 {\*ね/\*よ/\*わ}！ / 若 {\*ね/\*よ/\*わ}！  
      b ダラダラ {\*ね/よ/\*わ}！ / 新鮮 {\*ね/よ/\*わ}！

上で見られるように、ダなし型ではヨは許可される。ただし、この場合のヨは上昇調のイントネーションに限られ、女性の発話に主に見られることがあるタイプである。

また丁寧体については、形容詞文と同様許可されない。

- (49) \*ダメです！ / \*びちゃびちゃです！

なお、①、②、③で指摘した統語的な特徴以外にも、表出用法において「程度の強調」や「詠嘆」などをはじめとした文体的な特徴を持つことがある。

(50)a まっじめだ！      b まじめだー！      c まっじめだー！

(51)a まっじめ！      b まじめー！      c まっじめー！

(52)a どっろどろだ！      b どろどろだー！      c どっろどろだー！

(53)a どっろどろ！      b どろどろー！      c どっろどろー！

のように、促音介入、長音付与は、どちらのタイプでも可能であるが、形容詞文よりも頻度は少ない。

### 3-3 形容動詞文の表出用法における「基本」の型

ここまで、形容詞文の表出用法と形容動詞文の表出用法は、性質、ならびに統語的、文体的特徴において、ほとんどの点で共通しているということが確認できた。唯一、イ落ち型では現れないヨが、ダなし型においては現れるということだけであったが、この点を殊更取り上げて、この二つの用法を「異なったもの」として扱うことはできないだろう。

ここで形容詞文と形容動詞文との比較の視点ではなく、形容動詞文の基本型とダなし型を比較することで、結果として形容詞文と形容動詞文との異なりについて考察してみよう。ここまで表出用法として取り上げてきた例文は、それぞれ基本型とダなし型と並記してきたのであるが、実際のところ、「ダあり」と「ダなし」の形態の場合、例えば、「新鮮だ！」と「新鮮！」を比べてみて、ダなし型の方が典型的な形であると思われるのではないだろうか。このことについて、二つの視点から論じてみよう。

一つは形容動詞のタイプに即した視点である。形容詞をカヴァーすることを可能にしている形容動詞は、1で整理したように、語構成の上でバラエティに富む。和語系と漢語系については、見出し語として既に辞書に登録されている語群であると言ってよく、「名詞+ダ」といった二語によって構成されているという認識は薄い。実際、和語系の名詞、漢語系の名詞に、ダを付加して形容動詞を新しく生産していくということは、あまり見られないが、この点において閉じたクラスと言えるところであろう。しかし、その他のタイプは、語幹化を行えば、ダの生産性によって際限なく産出される。形容動詞として一括りにしても、そのタイプとしては、語として完熟しているタイプと、生

産され続けているタイプとがあるのである。

こうなると、ここまでダなし型として分類してきたクラスには、「元気だ」が「元気」になる「ダ落ち」と、「タプンタプンだ」が「タプンタプン」のままで出される「ダの不在」が共存していると言えるだろう。「タプンタプン+だ」によって生産され、それが「タプンタプン」の形で出されるのは、「タプンタプンだ」から「ダが落ちた」というよりも「ダを付加しない状態」でさし出していると言った方が実際に合致していると言えるのではないだろうか<sup>11</sup>。

次に、語尾としてのダの「形」についての視点である。表出用法の性質としてモーダルを問題にしたのであるが、形容詞と動詞は、「やさしい{ダロウ・カモシレナイ・ニチガイナイ}」「走る{ダロウ・カモシレナイ・ニチガイナイ}」のように、モーダルの形式はそれぞれの活用における基本形に接続される形で現れる。そして断定とそれ以外は、基本形とモーダルが接続した形式との選択になる。それに対して形容動詞文と名詞文の場合は、「きれいだ」と「きれいだろう」、「雪だ」と「雪だろう」の間の選択、さらに、「きれい{カモシレナイ・ニチガイナイ}」、「雪{カモシレナイ・ニチガイナイ}」のように、語幹あるいは名詞にそれぞれのモーダルの形式が後続する。また、表出用法の性質として「非伝達」を指摘した中で、「丁寧体」が現れないことを指摘した。形容詞文にしても動詞文にしても、それを丁寧体にするとき、有標としてデス・マスの付加が行われるのであるが、形容動詞文、名詞文における、(語尾、あるいは助動詞)ダについてはダとデスの形態上の選択が課される。こうした文末における文法形式の現われ方が、形容詞文・動詞文と、形容動詞文・名詞文の間では異なるのである。こうした異なりがあるとき、形容動詞文において表出用法としての形をさし出すとき、「Xダ」という形式が適切になるが、この形式での発話には抵抗が生じることがある。つまり、表出用法は男性女性のどちらであっても使用される。その時、ダという形式は、女性にとってやはり表現しにくい形式なのではないだろうか。この点は形容詞文・動詞文の基本形をそのままさし出すのとは大きく違うである

<sup>11</sup> もちろん、こうした観点は形容詞文でも言えることである。西尾(1972)以来、形容詞は閉じたクラスと言われることが多いが、しかし近藤(2017)で見たように、「エロい」「エモい」「謎い」など接辞による形容詞産出はある。ただしやはりその数はそれほどでもない。こうした新造語は、ここで述べた通り「イが落ちた」のではなく「イを付加しない」形でさし出していると言えるかもしれない。

う。そうなると、ダを伴った形式、それがたとえ語尾であったとしても、それを顕在化しない形式の方が、意味情報の増減に関与しないならば、表出用法としては選択しやすいことになる。

形容詞文の表出用法における基本型とイ落ち型の分布のあり方と、形容動詞文の表出用法の基本型とダなし型とは異なることを説明した。つまり、形容動詞文ではどちらかと言うとダなし型の方が日常の談話では好まれるのではないだろうか。ただし、「基本型」という呼称は、活用形の「基本形」に準拠して名付けたものである。そのためその呼称自体は変更しない。

こうした議論の先には、形容動詞文と名詞文との関係に言及しなければならないことになるだろう。形容動詞文と名詞文との形態的近似性から考えた時、名詞文にもダなし型があるということが指摘できることになるだろう。しかし、問題は、日本語学の領域では、「犬！」は「一語文」あるいは「未分化文」という扱いが一般的となっている。しかし、小論が述べたことに従って、基本型として「犬だ！」があり、ダなし型として「犬！」があるという見方が生まれる可能性もある。もちろん、「犬！」という発話は、従来指摘されているような未分化文である場合もあるだろう。しかし、「犬だ！」のダなし型である場合は、分化文である。こうしたことから名詞文についての議論を行うことが、「ダなし型」を論じていくうえで肝心である。形容動詞の語幹と名詞とは、それが指示に関わる語種か叙述に関わる語種かといった大きな違いがあることに注目しなければならない。名詞は、指示に関わることもできる語種であるため、「犬！」といった表現の場合、それは指示に関わっているか叙述に関わっているかによって、その表現が「一語文」なのか「表出用法」なのかの判断がつきにくい。これが指示に関わっているとこれまで考えられてきたがゆえに、その表現は未分化文として扱われてきた。しかし、もしこれが叙述に関わっているとしたら、それは分化文である。形容動詞の語幹(ダなし型)はもっぱら叙述に関わるのであり、この点において、従来言われている名詞文の「一語文」とは切り離して扱った方がいい。

#### 4 おわりに

小論は、「形容動詞文がある」ということと、「形容動詞文には形容詞文と同様に表出用法がある」ということと、さらに表出用法には「基本型とダなし型がある」ということを指摘し、それぞれについて考察をおこなった。「形容動詞文は、形容詞文とは性質的に連続性があり、名詞文とは形態的な連続性がある」ということ、そしてそのことから、「形容動詞文は形容詞文と名詞文との、両者の性質を備えた述語文であり、それは表出用法においてより特徴が顕著に発現する」ということを指摘した。以上の考察は、実は完結したものではない。それは小論を含め、近藤(2019)以後、述語の品詞に従って「形容詞文」を立て、そこに「述定用法」と「表出用法」があるとして論じてきたのであるが、述べ方からの整理において、平叙文、疑問文、命令文、感嘆文以外に、「表出文」が必要になるかもしれないという見通しが生じることも考えられる。表出用法は、形容詞文、形容動詞文、名詞文の他にも、「部屋が片付いている!」「落ちる!」といった動詞文、「え?何?犬?」といったような疑問文の形をしたものがあつたりと、いろいろとあるのではないだろうか。ただし、これを指摘した時、感嘆文との関係を論じなければならなくなるだろう。今回、小論において「形容動詞文表出用法」を指摘したことは、以上のような問題につながり、小論を以て終了する事柄でないということが確認できた。以上の問題については、それぞれ今後の課題とする。

#### 【参考文献】

- 飯豊毅一(1973)「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」(『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』明治書院)
- 岩崎勝一・大野剛(2007)「『即時文』・『非即時文』—言語学の方法論と既成概念—」(串田他編『時間の中の文と発話』135-157 ひつじ書房)
- 影山太郎編(2009)『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店
- 小池清治(2002) 項目「一語文」(『日本語表現・文型事典』小池他編 朝倉書店)
- 郡 史郎(1988)「強調とイントネーション」(『講座日本語と日本語教育』2 杉藤美代子編 明治書院)
- 近藤研至(2014)「『形容詞語基用法』について」(『日本語史の新視点と現代日本語』小林賢次・小林千草編 勉誠出版)
- (2017)「現代日本語の『形容詞化辞』について」『文教大学国文』46号



- (2019) 「形容詞述語文の表出用法」(『言語と文化』31号文教大学言語文化研究所)
- (2019)② 「状態記述型の形容詞文」(韓国日本言語文化学会 講演会資料)
- 今野弘章(2012) 「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」(『言語研究 141』日本言語学会)
- 笹井 香(2005) 「現代語の感動喚体句の構造と形式」(『日本文藝研究』57(2) 関西学院大学日本文学会)
- 清水泰行(2015) 「現代語の形容詞語幹感動文の構造 — 「句的体言」の構造と「小節」の構造との対立を中心として—」(『言語研究』148 日本言語学会)
- 富樫純一(2006) 「形容詞語幹単独用法について—その制約と心的手続き—」(『日本語学会 2006年度春季大会予稿集』)
- 西尾寅弥(1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 国立国語研究所 秀英出版
- 原田幸一(2013) 「大学生の日常会話における形容詞語幹終止用法」(『言語社会』7 一橋大学)
- フランス・ドルヌ+小林康夫(2005) 『日本語の森を歩いて フランス語から見た日本語学』 講談社現代新書
- 益岡隆志(1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版
- (2000) 「属性叙述と事象叙述」『日本語文法の諸相』 くろしお出版
- 村田菜穂子(2005) 『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』 和泉書院
- 八亀裕美(2008) 『日本語形容詞の記述的研究』 明治書院
- (2020) 項目「形容動詞」(『明解日本語学辞典』 森山卓郎他編) 三省堂

(本学教授)